

日本中國學會便り

The Sinological Society of Japan | Nippon Chugoku Gakkai

二〇二二年（令和三年）四月三〇日
第一號（通卷第三十九號）



八大人「安晚帖」叭々鳥圖（泉屋博古館蔵）

◆目録

- 卷頭言
二 理事長就任の挨拶
大木 康
四 なぜ儒教を研究するのか
土田健次郎
六 二〇二〇年コロナ禍における一講師の体験
阿部 順子
八 国内学会消息（令和2年）
十四 国史跡湯島聖堂と斯文会の現状
田口 暢穂
十六 二〇二一—二二年度各種委員会委員の構成
十六 各種委員会報告
論文審査委員会／出版委員会／選挙管理委員会／将来
計画特別委員会（二〇二〇年度大会アンケート結果報告）
十九 事務局より
十九 メールアドレス登録のお願い
二〇 第73回大会開催のお知らせと研究発表の
募集

編集●出版委員会 静永 健
〒819-0395 福岡市西区元岡744 九州大学文学部
メールアドレス：shizuka@lit.kyushu-u.ac.jp
発行●日本中國學會
〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内
メールアドレス：info@nippon-chugoku-gakkai.org
日本語版ホームページ：http://nippon-chugoku-gakkai.org/index.cgi

理事長就任のご挨拶

理事長
大木 康

このたび日本中国学会の理事長を拝命することになりました。いたって未熟者ではありますが、与えられた使命を全うできますよう、あとう限りの力を尽くしてまいりたいと存じます。会員のみなさまのご協力を

たまわりますよう、心よりお願い申し上げます。

理事長職をお引き受けしてしまった後で、改めて周囲を見回しますと、大きな問題が目白押しであることに、今更ながら愕然とする次第です。

コロナ下の活動

まずは、現今のコロナウイルス蔓延の状況下で、日本中国学会の活動をいかに維持していくか。昨年の第72回大会は、慶應義塾大学のみなさまの並々ならぬご苦勞により、オンラインによる開催ができました。今年も愛知大学のみなさまにより第73回大会の準備が進められております。愛知大学での開催が可能であった場合にも、ウイルスの感染防止対策など、平素とは異なった対応も必要になるでありません。このような状況下で準備にあたられる愛知大学のみなさまに、心より御礼申し上げます。ウイルスの終熄を願い、今年こそ、愛知大学名古屋キャンパスにおきまして、

みなさまに直接お目にかかることができますよう祈ってやみません。

なお、昨年、慶應義塾大学のみなさまのおかげで、オンラインによる大会開催のインフラが整いました。実際会場に行かなくても、また時間の制約を受けずに視聴が可能なこと、参加者が手元の資料にあたりながら質問やコメントができ、議論が深められたことなど、会場開催とはちがったメリットもあることがわかりました。このインフラを使わない手はありません。学会活動の重要な柱としての秋の大会開催は変わりませんが、秋以外の時期にオンラインによるミニシンポジウムや公開講演会などを開催するのも悪くないでしょう。さっそく理事会で議論し、企画を考えてみたいと思っております。

「中国」のこと

わたくしたち日本中国学会は、「中国」の哲学、語学、文学、そして日本漢学などを研究する研究者のソサエティーであるわけですが、昨今テレビ、新聞等で見える「中国」は、どこかマイナスイメージの「中国」ばかりであるような気がいたします。中国学に関心を持つ学生の減少には、実際こうした社会の背景もあるように思われます。学部学生の減少は、数年後の大学院生の減少につながり、さらに日本中国学会の新入会員の減少にも直結する問題、ひいては十年後、二十年後の日本における中国学の後継者不足、学問自体の先細りにつながることは火を見るより明らかなことです。

中国学の研究に携わるわれわれには、面白い、好き、という出発点があったはず。会員の一人一人がそうした自分自身の原点に立ちかえり、その面白さを発信していくことが、斯学の継承発展のためにも大切でしょう。日本中国学会が、そうした発信の舞台となれば何よりです。

国際化、学際化をめぐる

国際化にも、さまざまな側面があります。一つには日本における研究成果、研究情報の海外向けの発信。これについて、『日本中国學會報』の論文が翌年にはホームページを通して見られるようになり、『日本中国學會便り』もホームページ上で読むことができるようになっております。次なる段階は、外国語での発信になりますが、金文京理事長の下で、中国社会科学院文学研究所の『古代文学前沿与評論』誌

に、『學會報』『学界展望』の中国語訳が掲載されることになり、第70集のものが同誌第四輯（2020年刊）、第71集のものが第五輯（2021年刊）に掲載されました。これはCNKI（中国知網）によっても見られますので、『學會報』の『学界展望』は、より多くの人の目に触れることになるでしょう。

最近の日本中国学会の大会を見ていると、多くの留学生の方が発表されています。日本の大学で勉強されている留学生のみなさんは、日本において日本の中国学を学ぶ第一線におられ、将来、海外と日本をつなぐ架け橋となることはまちがいありません。日本中国学会としても、留学生のみなさんに発表の場を設け、最も身近な国際交流に貢献できることは何よりと思っています。ただ、投稿論文などの日本語をもっと磨いてほしいという意見もあります。そうした努力を続けていただくことも期待したいと思います。

日本中国学会は、「日本」の「中国学」会なので、「中国」とつながりを持つことは当然ながら、「日本」の各種学会とのつながりも重要と思います。ここは議論のあるところで、これからも議論をしていくことになると思います。研究発表や論文投稿を日本語のものに限っているのは、日本国内の他分野の世界に開かれていることを考えているからです。いま、大学の教員がやたらに忙しくなり、広く周辺領域にまで視野を広げる時間も機会も少なくなっているのが実状で、ますます自分の狭い専門領域以外に手が回らない状況になっているようにも思えます。こうした負のスパイラルを断ち切るためにも、他分野との積極的な交流が必要と思います。『日本中國學會便り』に、海外の学会に参加した報告がしばしば掲載されているように、会員個々人にとって、今やそれぞれの分野で海外の専門家、学会とつながっている機会は少ないと思います。その一方で、むしろ国内近接領域との交流の機会が減っているような気がしないでもありません。このあたりの交流促進も、日本中国学会がやせ細っていかないための一つの方策かと考えています。

学会事務の恒常化

土田健次郎理事長、金文京理事長のもとで、理事をつとめてまいりました。理事会等を通して学会事務局の仕事を見るにつけ、事務局が実に多くの仕事を担っていることを目の当たりにしてまいりました。さまざまな仕事が出てくる

ことは当然なのですが、幹事や事務補佐にあたる若手の教員、大学院生のみなさんもますます多忙になっている現状を考えますと、せめて名簿管理や会費納入事務等の日常業務は、恒常的な人員に処理してもらえる状況（場合によっては外注を含む）を作りたいものと考えております。これもまた、学会運営が安定して継続していくための下地となるでしょう。

また、現在連絡手段としての電子メールは、ますます重要になっています。かつては郵便、電話が主たる通信手段でしたが、自分自身のこの一週間ほどの生活を顧みても、電話を使った機会は何度もありませんでした。過渡的な期間を設けることは当然ながら、日本中国学会としても、各種連絡、名簿、選挙など、さまざまな方面での電子化は避けて通れない道であると思います。そこでまずは、会員のみなさんにメールアドレスの登録をお願いするところからはじめてみたいと考えています。簡単に入力可能ですので、日本中国学会ホームページからのご登録をお願い申し上げます。個人情報の取り扱いに細心の注意を払うことは申すまでもありません。

以上、いろいろ考えましても、わたくしには手にあることばかりなのですが、会員のみなさま、そして評議員、理事のみなさまの力を大いにお借りしながら、会の発展につとめてまいりたいと思います。改めてご協力のほどをお願いいたします。会の発展のため、みなさまからの積極的なご意見を歓迎いたします。

最後に、会員各位のますますのご健勝をお祈り申し上げます。



蘇州風景 また一日も早く訪れたい。

なぜ儒教を研究するのか

土田健次郎

早稲田大学名誉教授

近年中国思想を学ぶ学生が減少しているという実感は会員諸氏も持たれているであろう。アジア学、更に人文学全体にその傾向があるとはいえ、もともと多くはなかった研究者数が減り続けるのを見ると、

この領域の研究の場の確保が危ぶまれる。原因は複数だろうが、根本的なこととしてかかる思想そのものの魅力が発信できていないことがあると思われる。そもそも私がこの分野をなぜ研究するようになったかと言えば、この短文では言い尽くせないが、やはり魅力を感じたからである。

このようなことをあえて書くのは、私の偏見かもしれないが、近年の研究者が中国思想そのものに対して魅力を感じているのか疑問に思うことが多いからである。中国文学では研究者になる以前に漢詩だの小説などを愛好していた人をまだ見つけられるが、『論語』や『老子』の思想に魅かれたのでこの道に入ったというケースが以前よりも減っているような気がする。過去の思想を無批判に賛美しろというつもりはさらさら無いが、全く魅力を感じない対象を魅力的に他者に伝えることができるだろうか。

私が学生の時に福永光司『莊子—中国古代の実存主義』

という中公新書がよく読まれ、それによって中国思想への関心をかきたてられた人たちがけっこういた。正直いって私は莊子が実存主義だとは思えなかったし肌に合う内容では無かったが、この書には人を呼び込む熱量があったのは確かである。なお私は福永先生からは『魏晉思想史研究』に収められている論文をはじめ大きな学恩を受けている。思い起こせば私が大学入学後最初に受けた「東洋思想」という授業のテキストは津田左右吉『シナ思想と日本』であった。あの中国思想の全否定のような内容を読むとこの分野を専門にしたいとなくなる。本書のかけがえのない存在意義は後に理解できるようになり、今ではこの方面を学ぶ学生が一度は通過すべき名著であると確信しているが、最初に読ませる本ではない。

私は一年ほど前の大学定年直前に、長年の朱子研究を何とか『朱熹の思想体系』にまとめることができたが、なぜ朱子を対象にしてきたかという、やはりその思想の魅力に引かれていたのである。受講生からも「先生は朱子が好きですね」としばしば言われた。学生諸君に対して欧米の哲学のあれこれの議論で味付けをして中国思想を解説するだけでは、欧米哲学を学んだ方がよいのではないかという感想を持たせて終わってしまう。東西思想の総合というのも明治からあったが、どれほど成功してきたらうか。とって過去の思想をめぐる歴史的事象の究明というばかりでは、中国史の一部門の思想史のようになってしまう。私は修養体験と思想言説が渾然とした中国思想独自の達成の意味は伝えられるように思う。近年は内外で徳倫理学や共同体主義の立場からの儒教評価も見られたりしている。ただここでは、このような思想自体の魅力以外にも中国思想、特にその中でも時代遅れの象徴のように見なされがちな儒教が今でも積極的な研究対象になりうる例を二点あげてみたい。

まず忠誠の再考察の手がかりとしての意義である。吉川幸次郎先生は儒教をヒューマニズムと言い、そこには人間の善意への信頼があると繰り返し述べた。ただ吉川先生の後継者でこの儒教観を継承している人はあまり多いようには見えない。ヒューマニズムとか善意とかいった甘い響きが、儒教を覆う厳格さの印象とそぐわないからであろう

か。私も人間中心主義が儒教にはあり、種々の性説を持ちながら、荀子のいわゆる性悪説も含めて人間の道徳的可能性を説かない儒教は無いと思う。ただやはり儒教の儒教らしさは忠孝思想にあり、人間中心主義も人の善意なるものも、君臣関係、親子関係の中で最善に発揮されることが期待されている。しかしだからといって儒教を旧弊な封建思想ということで否定しておけばよいというものではない。君主制が無くなっても、国家、制度、集団とか、指導者とか、組織を象徴する旗とか歌とか、忠誠の対象は至る所にある。文化大革命の時には紅衛兵が毛沢東に対する忠誠を表す「忠字舞」を躍った。人民に対する忠誠と言っても結局は指導者や組織に対するものにならざるをえないように、小さなサークルはともかく、大集団の長期にわたる維持には強烈な指導者が必要になるというジレンマが常に存在する。人間の相互福利と共生を目指すための国家や組織のはずが、それに対する忠誠のゆえに人命を犠牲にする結果を生み出したり、またそのような死を遂げる者を芸術が称え傑作を生み出してきたのも事実であろう。忠誠心は人を酔わせる高揚感をもたらすものなのである。忠誠の尊重は古代から世界に広く見られてきた。ただそれを独立した問題として多様な議論を展開し、現実との相克の中で格闘し続けた点で儒教が際立つのであり、その経験は、忠誠を成立させてきた心理構造の解明に貢献するのではなかろうか。現今は「分断」が問題になっているが、それを克服するためにはより高次な帰属対象の設定とそれに対する何らかの忠誠が求められるはずで、その際には、忠誠の対象は何か、それは固定されるべきなのか、忠誠の実践内容はどのようなものか、更には忠誠と他の諸価値の関係はどうなるのかをも見定める必要が出てこよう。

次にあげたいのは、儒教の日常の思想としての面の再評価である。今のコロナ騒ぎで思い出すのは、同じく非日常の極みであった東日本大震災である。津波が陸地を走り、逃げる車に追いつきそうになり、その先は放映されず解説も無い。限りなく残酷な画面であった。私が奉職していた早稲田大学の出版部では、この大震災をどう受け止めるかというブックレットのシリーズ『震災後に考える』の刊行を計画したが、ラインナップはおのずと地震のメカニズム、

災害対策、原発事故、災害時のコンビニの効用、災害ボランティア、といった自然科学や社会科学が中心になった。そこで編集者が私に人文関係のものも入れたいので何か書いてくれないかと言ってきた。その結果書いたのが『日常の回復—江戸儒学の「仁」の思想に学ぶ』である。大災害という非日常の極みにおける人々の行動パターンが、日常生活の倫理と連続し、それゆえ同型の日常の回復が反復されることに注目し、江戸時代に発達した日常の思想としての儒教を書いた本である。副題は編集部の希望である。ただ本書は救荒に特化した内容ではなく、その後大学から出された『震災後に考える—東日本大震災と向きあう92の分析と提言』に書いた「震災復興と共同体の倫理—江戸時代の事例から」の方が直接この問題を取り扱っている。

江戸時代の東北地方では度重なる災害に襲われた。地震、噴火、異常気象、それに伴う飢饉で多くの人命が失われたが、生き残った人たちの文化的遺産子によって、同型の村が再生されていった。私の祖父は秋田の山奥の矢島の出で『矢島史談』の著があり、上京した後も夏ごとに秋田にもどり郷土史を若者に教えた。そのために我が家には秋田関係の文献があり、この機会にそれを読んでみようと思った。ちなみに私の祖先は天保の大飢饉の時に藩命で米を集めるために酒田、越後の間を何回も奔走し、最後は酒田で客死した。

江戸時代の儒教は日常と非日常の両方の日常に対して行動原理をあたえようとした。ここでは日本儒教の例をあげたが、もともと本家の中国でも儒教各派は自派の方が日常に対し切実であると主張し合ういわば日常の奪いあいをしてきたのであり、それについては「日常の思想としての儒教」(『現代思想』所載)という一文を草したことがある。日常の思想というと、日常の拘束や妥協をいくらでも含み込み、哲学としての純度が落ちるとして軽視されがちだが、そもそも思想は日常生活で生きてこそ意味がある。今様の観念を駆使して哲学的言説を弄しても実生活は名利の念に翻弄されていては、知的好奇心が身過ぎ世過ぎの手立てに止まる。よくある処世智的格言の供給というようなことではなく、日常の思想を結晶させるためのヒントを儒教から汲み取る試みはもっとなされてよいのではなかろうか。

二〇二〇年コロナ禍における 一講師の体験

阿部 順子

慶應義塾大学非常勤講師

刻だった。膀胱内は腫瘍で埋まり、リンパ節にも転移していた。両方の腎臓は水腎症になっていて、腎不全を起こす危険があった。来年度は「週末介護」生活になる、と私は覚悟した。非常勤先の大学を一つ辞め、他の大学の出講曜日を変更してもらい、週末の時間を空けた。

3月初め、母は入院して内視鏡手術を受け、腎不全の危機はひとまず去った。しかし、母は幻視、幻聴、妄想などの「せん妄」を起こし、そしてやはり認知症を発症していた。

このころ、新型コロナウイルス感染拡大は対岸の火事ではなくなっていた。非常勤先の各大学で懇親会や会議が中止され、教員に対して海外渡航の自粛が要請された。3月中旬には、新年度の授業開始を遅らせることが決まった。大学からのメールには大量の添付ファイルがぶら下がり、リンクが何本も貼られていた。私は病室の母のベッドの横で、母の妄想話に適当に相づちを打ちながら、各大学から次々と送られてくるメールと添付ファイルとリンク先のページに目を通し、メールをフォルダ毎に整理する作業をずっと続けていた。

3月下旬、対面授業を見合わせ、オンライン授業を実施することが決定した。私はしばらく秋田にとどまることにした。出版社に連絡して、教科書の紙媒体とデータを送ってもらった。出版社は教科書データの提供に総じて慎重だったが、大学のオンライン授業導入を早々に見越したところか、「ポストコロナ」をも見据えた対応をとった出版社もあった。さらに通販で辞書、文法書、比較的高スペックなノートパソコン、web会議用ヘッドセットを購入し、実家のインターネットの契約内容もグレードアップした。困ったのは漢文の教材だったが、知り合いの先生から漢文教材のデータ一式を融通してもらえた。

4月下旬からオンライン授業が始まった。私が使ったweb会議システムはWebexとZoom、学習管理システムはmanaba、Google Classroom、その大学独自のシステムの3種類、クラウドは主にGoogle DriveとBoxである。

オンライン授業は過重労働だった。非常勤講師の給与は1コマ1ヶ月30,000円前後である。1年度で約360,000円、前後期で計30回授業があるとして、授業1回のペイは12,000円ほどになる。私の場合は、資料のスライド作成に3~4時間、お知らせ・授業内容・課題・課題解答の作成と公開設定に1~2時間、webミーティングに60分間、課題の採点に1~

十二支の最初である子年は「はじまりの年」であるという。私は複数の大学で非常勤講師をしている。授業数は週に10数コマ、科目は主に中国語、あとは漢文である。

2019年の年末、中国の武漢で新型コロナウイルスによる肺炎が流行していることがニュースになっていた。しかし2020年1月末の時点では、私はこう思っていた。一時的に流行する感染症であり、中国当局が徹底した対策をとって、いずれ終息するだろう。

2月初め、私が採点と成績評価に追われていたとき、秋田の実家の母から電話がかかってきた。頻尿がひどく、地元のD総合病院を受診したところ、簡易検査で膀胱がんの疑いがあると言われたという。私は急遽秋田に帰省した。正月には普通だった母は、ほとんど寝たきりの状態になっていた。

2月中旬、母はD総合病院でCTとMRIの検査を受けた。検査室の看護師が私に耳打ちした。「お母さんに靴を履くよう言ったら、靴下を丸めて靴の中に入れました。認知症があるかもしれません。」検査後の診察で、医師は「明日K総合病院に行ってください。そのまま入院になる可能性もあります」と言った。

K総合病院は地元最大の医療拠点である。母の病状は深

3時間かかった。その他に学生対応や各種書類の提出などの業務もあった。単純計算で時給1,000～2,000円の間で働いていたことになる。履修学生が多いほど実質的な時給は下がるから、時給数百円で働いていた講師もいるだろう。

このことについては、大半の大学はマクロ・マネジメントを採用することで「落としどころ」としたようだが、マイクロ・マネジメントを採用することで、まるで過重労働などは存在しないかのような姿勢を貫いた大学もあった。

母は4月初めから抗がん剤治療を始めていた。病院の紹介で母にはケアマネージャーがつき、母の要介護認定を申請して要介護2の認定が下りた。母は抗がん剤の副作用で感染症に罹りやすくなっていたから、面会禁止の期間もあった。しかし正直、これは助かった。

私は朝9時から昼までwebミーティングで授業をし、隙間時間に課題の採点と家事をやり、午後2～3時ごろまで授業の準備、それから病院に行って母に差し入れと洗濯物の受け渡し、医師・看護師・ケアマネとの打ち合わせ、帰宅して母の衣類の洗濯と夕食の準備、夕食後は深夜12～2時ごろまで授業の準備、という生活をしてきた。

病院のベッドの中で毎日を過ごす母の認知症は進行していった。私は母を介護するつもりはなく、現実的にそんな余裕はなかった。ケアマネと話し合っ、母が退院したらグループホームに入所させることを決めた。

当時、情報過多のせいか、私の脳は余計な情報の受け入れを拒否していた。新聞、本、漫画などはすべて読めなくなった。体がふらつき、あちこちにつかって、少しよろめいただけで転ぶようになった。回転性のめまいも起き始めた。しかし6月下旬になると、私は自分がオンライン授業になんとか慣れたことを自覚した。手が自然と動いて作業できるようになっていた。ルーティン化したらいい。

7月初めに母の抗がん剤治療は終了したが、終了と同時に、がんは猛烈な勢いで再び進行し始め、膀胱の隣の臓器に浸潤した。さらに8月の初め、母は腎機能が低下して腎臓造設手術を受けた。母は一気に要介護5になった。母が急速に死に向かっているのは明らかだった。医師と話し合い、今後は積極的な治療はせず、緩和ケアのみを行なうことに決めた。

8月の帰省ラッシュに備え、病院は面会が全面禁止になっ

た。それから1ヶ月間、母とは一度も会えなかった。9月初めに母の退院が決まり、医師らと打ち合わせをした。母は食欲不振で低栄養状態に陥っていた。医師は経鼻経管栄養を提案したが、私は断り、水分点滴だけを頼んだ。医師は、母は「あと1ヶ月くらい」だと告げた。

退院して久しぶりに会った母は上機嫌だった。自分の病気のことはすっかり忘れていたが、私と兄の顔と名前は覚えていた。アメリカ在住の姉も帰国し、4週間もの自主隔離を経て、9月末にやっと母と対面した。母は姉の顔と名前も忘れていなかった。

9月末から後期のオンライン授業が始まった。私は秋田から日本、韓国、中国に、姉も教員なので秋田からアメリカに遠隔授業を行なった。姉はデジタル教科書とGoogle Meetを使用していた。

10月に入ると、母はほぼ意識がない状態が続いた。訪問看護師が、母はあと数日だと判断して、入院が決まった。入院前夜は、母の傍で、兄妹3人で一晩を過ごした。母は入院して2日目の未明に亡くなった。

10月から11月にかけて、日本中国学会大会をはじめとして、私も所属させてもらっている日本宋代文学学会大会、毎月の江湖派研究会例会もオンラインで行われた。他の中国学関連の学会も軒並みオンライン開催されたと聞いた。

研究会、学会、シンポジウムなどのオンライン開催は、一時的・便宜的なものではなく、これからの開催のあり方を示していると思う。対面で学会を開催できるようになったとしても、会場にいる参加者と遠隔地にいる参加者とが、インターネットを通じて発表・討論する機会を設けないことは、もはや非現実的だ。

授業についても、コロナ禍が終わったらコロナ禍の前に戻ることは、私にはどうしても思えない。2021年2月現在、非常勤先のどの大学も、2021年度は対面授業の実施率をさらに引き上げる計画だが、対面授業でもオンラインとの併用になる。これはコロナ禍後も続くことになるだろう。

子年の2020年はコロナ禍という災厄に満ちた年であったが、確かに「はじまりの年」でもあった。コロナ禍が起きたことは、私たち人間にはどうしようもなかった。しかしコロナ禍によって、私たちが新たに得られたものがあつたことも、また事実だと思うのである。

国内学会消息 (令和2年)

●北海道大学中国哲学會

例会

1月31日

・唐詩における使動表現 名畑 嘉則

2月28日

・修士論文成果発表會 熊 征

7月31日

・王莽「自本」考 市村俊太郎

10月23日

・卒業論文構想発表會 長谷川健太

・修士論文構想発表會 何 松延

11月27日

・『説文』の「諷籀書九千字」の段注をめぐって
路 勝楠

第50回大會 8月29日 オンライン開催

・陶淵明の詩文における「門」のイメージについて
一阮籍との比較を中心に 熊 征
・皮錫瑞『春秋通論』首條をめぐって 吉田 勉
(路 勝楠・熊 征 記)

●北海道大学中国語・中国文学談話會

刊行物

『饕餮』第28號 (9月)

『火輪』第41號 (3月)

『連環畫研究』第9號 (3月)

(藤井 得弘 記)

●秋田中国学会

秋季第170回例会 11月28日 於秋田大学教育文化学部

・左伝の「抜本塞源」と現代名教論 吉永慎二郎
(羽田 朝子 記)

●東北シナ学会 (中国思想・中国文学分野のみ抜粋)

二月例会 2月19日

[卒業論文発表會]

・莊子郭象注の思想 新目 知博

二月例会 2月20日

[卒業論文発表會]

・揚雄『法言』にみる学問観 小野 周平

[修士論文発表會]

・李卓吾思想研究—『明燈道古録』考 相原 貴次
(尾崎順一郎・菅原 尚樹 記)

●東北大学中国哲学読書會

第202回 9月25日

[修士論文構想発表會]

・南京時代における王陽明の思想と表現について
費 康幸

第203回 10月23日

[卒業論文構想発表會]

・雍正帝の皇帝像と人物像—『大義覺迷録』を中心に
新井 太治
(尾崎順一郎 記)

●中国文化学会

例会 3月9日 於大妻女子大学

・重野安繹の漢文教材 木村 淳
(内山 直樹 記)

●お茶の水女子大学中国文学会

9月例会 9月12日 オンライン開催

・南朝文学における「都」に関する考察 董 子華

12月例会 12月5日 オンライン開催

- ・趨向補語 [V₁V₂+来/去] 中“来/去”的隱現
田 禾・郭 雲輝
- ・香港の映像作家・羅玉梅の「殖物」
—文学と映像の協奏— 西野由希子
(竹野 洋子 記)

●六朝学術学会

刊行物

『六朝学術学会報』第21集 (3月)
(山崎 藍 記)

●日本杜甫学会

刊行物

『杜甫研究年報』第3号 (3月)
(紺野 達也 記)

●中唐文学会

大会 10月9日 オンライン開催

- ・詩跡としての三郷の成立とその変遷
—唐代から宋代まで— 富 嘉吟
- ・消える茶商人 福田 素子
[シンポジウム]
- ・遠隔授業における古典・語学—実践報告と展望
遠藤 星希・大山 岩根・
高芝 麻子・長谷川真史

刊行物

『中唐文学会報』第27号 (10月)
(遠藤 星希 記)

●日本宋代文学学会

第七回大会 11月7日 オンライン開催

- ・「范履霜」攷—范仲淹と琴曲「履霜操」 早川 太基
- ・康與之作品編年試探 松尾 肇子
- ・科学と文学—唐宋の下第詩— 高津 孝
- 第五回「唐宋八大家」シンポジウム
JSPS 基盤研究 (B)「唐宋八大家散文の特色とその受容
に関する総合的研究」共催
- ・サクラ (桜花) の漢名をめぐる近世日本の議論と宋詩
合山林太郎
- ・歐陽脩は二重人格か
—詞の作成場面と受容環境に着目して— 東 英寿
(浅見 洋二 記)

●日本聞一多学会

刊行物

『神話と詩』第18号 (3月)
(横打 理奈 記)

●日本詞曲學會

詞籍「提要」譯注検討會

- 9月4日、6日 オンライン開催
『四庫全書總目提要』「詞曲類」の譯注および検討
『唐宋名家詞選』譯注検討會

8月29日～31日 オンライン開催
龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および検討
小風絮會

1月25日、10月24日、11月28日 オンライン開催
龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および検討
刊行物

『風絮』第17號 (12月)
(藤原 祐子 記)

●國學院大學中國學會

第218回例会 1月11日

- ・道教における魂魄を拘制する方法について 浅野 春二
- ・『荀子』における引『詩』に関する一考察
—その様式と機能とについて— 河野 貴彦
- ・『東坡志林』小考—蘇軾の作為について— 岩本 優一

第219回例会 10月24日 オンライン開催

- ・「聖人可學」説における「學」の階梯
—「下學而上達」の解釈を巡って— 今瀬英一郎
- ・程小青の探偵小説創作の特徴に関する研究
—作品の啓蒙性を中心に— 羅 頌

第63回大会 10月25日 オンライン開催

[公開講演]

- ・思いと言葉—「言意の弁」をめぐる— 赤井 益久

[研究発表]

- ・楚辭「離騷」美義小考—美の構成要素について
木村 剛大
- ・後漢・高彪の所覆刺為書について 宮内 克浩
- ・浅見綱斎『論語師説』について
—日本に於ける『論語』実践— 大貫 大樹
- ・再び「晷」について—一段注に散見する例を中心に—
大橋 由美
- ・郁達夫『日記九種』を読む 大久保洋子

研究会 オンライン開催

唐代文学研究会 (毎週火曜日) —唐詩を読む— 赤井 益久

宋代文学研究会 (毎週木曜日) —『蘇軾全集校注』を読む—
石本 道明

中国現代文学研究会 (毎週金曜日) —謝冰心作品を読む—
牧野 格子

中国礼俗文化研究会 (毎週金曜日)
—「三魂七魄」説の研究— 浅野 春二

奨励賞表彰 3月22日

[修士論文]

- ・『論語』「古諺」研究序説—説得様式と思想的価値—
柴崎 一孝

[卒業論文]

- ・台南道教における分燈科儀の研究 富田 綾美

刊行物

『國學院大學中國學會報』第65輯

『崑崙』226号～第228号

(青木 洋司 記)

●早稲田大学東洋哲学会

第37回大会 9月15日 オンライン開催

- ・道元の諸法実相観 米野 大雄
- ・弁才天の悪龍教化と龍口明神—江島縁起説話の成立を
めぐって— 田中 亜美

・「暢玄」の「玄」にみる『抱朴子』内篇の著述意図
富田 絵美

・『声聞地』と『法蘊足論』の関連性：止観を中心として
阿部 貴子

・経学としての朱子学—朱熹の『孟子』解釈をめぐっ
て— 垣内 景子

[講演]

・中世の神事芸能を考える 山本ひろ子

刊行物

『東洋の思想と宗教』第37号 (3月)

(崔 鵬偉 記)

●早稲田大学中国文学会

第45回秋季大会 11月28日 オンライン開催

- ・『四艶記』から見た葉憲祖の戯曲創作 劉 洋
- ・白と灰色の交わり—顔歌『五月女王』における語りの
二重構造 徐 曉璇
- ・広東語の特殊字音について 塩田 祥大

[講演会]

・杜甫を論ずること
—その文学史における位置を考える— 松原 朗

刊行物

『中国文学研究』第46期 (12月)

(柴崎公美子 記)

●慶應義塾中国文学会

第5回大会 12月12日 オンライン開催

[講演]

- ・大沼枕山の詠史詩について 詹 満江
- ・魯迅研究を顧みる—わが三十三年の夢— 長堀 祐造
(関根 謙 記)

●京都大学中国文学会

第35回例会 7月20日 オンライン開催

- ・張資平作品における「時代病」
一男の肺結核、女のヒステリー 祝 世潔
- ・空海の『三教指帰』について—辞賦の文体と密教思想の
萌芽 (香港大学) ニコラス・モロー・ウィリアムズ
- ・杜甫の作った冷麵—「槐葉冷淘」の詩について
興膳 宏

刊行物

『中国文学報』第93冊 (4月)

(緑川 英樹 記)

●中国藝文研究会

合評会・研究会 7月26日 オンライン開催

- ・北大秦簡『教女』について 草野 友子
- ・石経山房本『陶淵明文集』の刊行について 富 嘉吟
- ・『史記』「管晏列傳」に関する考察 時信 和佳
- ・『列仙傳』の中の仙人になる方法 許 曉璐
- ・『詞綜』と日本の知識人たち—その舊藏者をめぐって
靳 春雨

合評会・研究会 12月27日 オンライン開催

- ・『列仙傳』の作者のイメージ及び仙人實在の裏付けにつ
いて 許 曉璐
- ・唐代傳奇小説の中の類話群—細部描寫による虚構の一
つの體現として 唐 鈺
- ・蘇轍の仕官・隱棲に對する考え方について 鄭 玲玉
- ・商家の娘から女儒へ—江戸後期女流學者高橋玉蕉の傳
記研究 詹 斐雯

刊行物

『學林』第70號 (7月)・第71號 (12月)

(萩原 正樹 記)

●大阪大学中国学会

刊行物

『中国研究集刊』第66号 [奈号] (8月)

今号より電子版 <https://www.chugoku-kenkyu-shukan.org/>
に完全移行

(湯浅 邦弘 記)

●懷徳堂研究会

10月17日

ホームページ <https://www.kaitokudo-kenkyukai.org/> を新設。

第29回研究会 12月27日

「オンライン時代の教育・研究」を考えるオンライン会議

- ・大東文化大学のオンライン授業 湯城 吉信
- ・受講生から見たオンライン授業の問題点 五十嵐妃桜
- ・日本—台湾—中国をつなぐオンライン研究会

黒田 秀教

(湯浅 邦弘 記)

●中国出土文献研究会

<http://www.shutudo.org/>

第72回研究会 2月29日、3月1日 於大阪大学文学部

- ・安大簡『詩経』秦風駟驥の章次転倒について 湯浅 邦弘
- ・清華簡 (捌) (玖) の字迹 福田 哲之
- ・清華簡 (八) 『心是謂中』 釈読 中村 未来
- ・古代中国兵学における日月暈占について—馬王堆漢墓
帛書『天文氣象雜占』『日月風雨雲氣占』を中心として
椛島 雅弘
- ・フランス国立図書館での調査報告 椛島 雅弘
- ・『漢書』芸文志所載『蒼頡伝』考 福田 哲之
- ・漢牘本『蒼頡篇』について 福田 哲之
(湯浅 邦弘 記)

●広島大学中国思想文化学研究室研究会

第208回研究会 2月13日

[卒業論文発表会]

- ・阮籍の思想—『通老論』『達莊論』から— 藤田 奨己
- ・中山城山の思想について—『校正天文訓』を中心に— 矢野 愛子

第209回研究会 11月6日

[卒業論文中間発表会]

- ・葛洪『抱朴子』外篇の求める事務能力 千鶴 恵史
- ・『戦国策』研究 高井 未来

[修士論文中間発表会]

- ・『礼記正義』について 吉岡 佑馬

第210回研究会 12月8日

[卒業論文テーマ発表会]

- ・古代中国の説明神話について 石松 紗英
- ・明治十年代の雲井龍雄の思想の波及について 遠藤 瑞希
- ・干宝の描く古い師—『搜神記』を元に— 白井 祥樹
- ・『論語』の礼教性と宗教性について 西本 尚太
- ・荻生徂徠の葬礼論—儒教儀礼受容の試み— 福原 凜
- ・吉田松陰の獄中教育について 毛利 彩香
- ・章炳麟の社会像について—法制論と個人観を中心に— 吉川 悠介

刊行物（発行人 東洋古典学研究会）

『東洋古典学研究会』第49集（5月）・第50集（10月）
（有馬 卓也 記）

●広島大学中国文学研究室研究会

第220回 1月30日

[修士論文最終発表]

- ・『棟亭集』と『紅楼夢』—「梅」を中心に— 陳 雲鵬

第221回 2月6日

[卒業論文最終発表]

- ・李邕碑文の書風—その碑文を中心として— 福田 知紗
- ・江戸漢学者大槻清準に関する研究

- 『孟子』考証を中心に— 黒沢 悠馬
- ・『西瓜』からみる大正天皇の詠物詩表現 中田 彩香
- ・田中貢太郎研究—田中貢太郎の事績と『剪燈新話』の翻訳— 中野 泰峰
- ・「奔月」の受容について—竹内好の評価の変遷を中心に— 田中 竣也

第222回 7月30日 オンライン開催

[修士論文最終発表会]

- ・中国古典小説における「塩商」—明代における「塩商」— 劉 易曼
- ・原采蘋『采蘋詩集』全訳注 鄭 然

第223回 11月26日

[卒業論文中間発表]

- ・『太平広記』再生説話の研究 —各巻の特徴及び配列について— 森島 豊大
- ・『太平広記』変身譚の研究—虎の変身について— 池田 詩貴
- ・『笑府』における言語遊戯の分布とその特徴 門脇 響
- ・近代漢文教材の研究—『十八史略』を中心として— 東田 彩音
- ・竹内好の魯迅翻訳について—『故事新編』を中心に— 濱田 菜月

第224回 12月24日

[修士論文構想発表]

- ・伝陸機筆「平復帖」に関する研究 楊 春雨
- ・「両拍」における凌濛初の編纂態度—『太平広記』からの書き換えを中心に— 陳 傑爽
- ・明清白話小説における一人称代名詞の研究—『金瓶梅』第一回から第十回までを中心に— 朱 未
- ・『情史類略』における馮夢龍の「情」観—巻一から巻五までの文末評語を中心に— 高 玥峰

[修士論文中間発表]

- ・傳玄詩研究—傳玄の模擬作について— 曾 令之

刊行物 『中国学研究論集』第38号（4月）

（川島 優子 記）

●中国中世文学会

刊行物

『中国中世文学研究』第73号（3月）

（川島 優子 記）

●山口中国学会

大会 12月19日 於山口大学人文学部

[講演]

・私の名物学研究の試み 馬 彪

[研究発表]

・文化人類学からみた風水研究史 小林 宏至

（根ヶ山 徹 記）

●九州中国学会

第68回大会 10月31日 オンライン開催

・徐葆光との交流からみる蔡文溥 前堂 颯世

・山田方谷の『義喪私議』について 韓 淑婷

・構文ネットワークから見た中国語における禁止表現から接続詞への転成 朱 冰

・存現文のNPIについての一考察 謝 平

・動詞＋結果補語（形容詞）構文の認知言語学的考察

秋山 淳

・前漢期における法に反する君主行為規制の議論について—董仲舒を中心にして 横山 裕

・宮内庁所蔵の『李卓吾先生批評北西廂記』について

黄 冬柏

・明代白話小説と大衆の生活 井口 千雪

刊行物

『九州中国学会報』第58巻（5月）

（藤井 倫明 記）

●九州大学中国文学会

第308回中国文藝座談会 2月1日

・司馬懿考 大園 大輔

・諸葛亮の人物像について 藤原 惣

・李卓吾の思想と『水滸伝』 坪郷 孝則

・『関微草堂筆記』の創作意図について 干 佳琳

第309回中国文藝座談会 3月7日

・唐詩押韻攷 鹿島 大吾

・宋詩における猫 田代 舞

・『三才図会』鳥獣部の原典 福田 華矢

・『紅樓夢』の中の侍女 堤 駿都

・「嫩」の文学史的考察 林 暁光

第310回中国文藝座談会 9月24日 オンライン開催

・陸機「漢高祖功臣頌」の創作時期について 王 昊聰

・中国人民大学蔵 周之標『四六瑄朗集』について

岩崎華奈子

・目加田誠博士旧蔵一九三四年大学講義プリントについて 稲森 雅子・王 昊聰・汪 洋・

木村 淳美・陳 禕璇

第311回中国文藝座談会 11月26日 オンライン開催

・司馬相如「喻巴蜀檄」について 木村 淳美

・曾國藩とその幕府における文学活動

—詩歌唱和を中心に 汪 洋

刊行物

『中国文学論集』第49号（12月）

（井口 千雪 記）

◆下記の学会は残念ながら活動を一時休止されました。

●東北中国学会

●筑波中国学会

●日本漢詩文学会

●名古屋大学中国哲学研究会

●東山之會

●阪神中哲談話会

●中国四国地区中国学会

一日も早い復旧をお祈りします。

国史跡湯島聖堂と斯文会の現状

今回ご報告する国史跡湯島聖堂は、改めて言うまでもなく、昌平坂学問所の跡である。

その大成殿をはじめとする建物・遺構の維持管理、運営には、公益財団法人斯文会が当たっている。

斯文会はまた、長い伝統を持つ学術団体でもある。現在、学術誌『斯文』を刊行し、『論語』をはじめ、東洋の学芸の普及を目的とした各種文化講座を開講しているほか、学問所以来の伝統を伝えるため、孔子祭、先儒祭などの伝統行事も公開で実施している。また、有形の文化遺産としては、朱舜水の将来した孔子像を蔵すること、構内の入徳門が関東大震災、太平洋戦争の二度にわたる災禍を免れ、寛政期の姿を残していることも特記しておきたい。

当会は、大正七年（1918）に現在のような法人組織となった。その頃の中核をなしたのは、宇野哲人、塩谷温、服部宇之吉、諸橋轍次、安井小太郎といった、当時の漢学界を代表する大家であった。その後、関東大震災で大きな被害を受けたが、昭和十年（1935）には現在の建物（設計：伊東忠太）が竣工、学術活動が再開された。戦後、昭和二十三年（1948）には、服部宇之吉、加藤常賢両博士によって、斯文会は学術団体として東洋の学芸研究・普及を目的とすることが確認され、戦前からの学術誌『斯文』も継続して刊行することとなった。以後、加藤常賢、宇野精一、石川忠久理事長を経て、宇野茂彦現理事長に至っている。

要するに当会は、それぞれの時代の漢学＝中国学の専



入徳門



「史蹟湯島聖堂」の標柱（題字：服部宇之吉博士）と仰高門

門家が中心となって活動を続けてきたと言える。日本中国学会や全国漢文教育学会など、中国学、漢文学関係諸学会の役員経験者、会員が斯文会の賛助会員となり、また斯文会館でそれらの学会の連絡先をお引き受けしているのも、中国学者たちと当会の長い間の密接な関係によるものである。

ところで史蹟湯島聖堂の通常の維持管理、学術普及活動の諸経費は、公益財団である斯文会が担っており、講座受講料、賛助会員からの賛助会費、史蹟参観者の記念品購入代などを主なよりどころとしている。しかし、歴史的建造物の維持や構内整備（樹木の手入れなど）には相応の経費を要する。ところが、近年、漢学に対する一般の関心が薄れてきたためか、講座受講者の減少が目立つようになった。さらに昨年来のコロナ禍で、受講者、参観者が減少し、また想定外の支出もあって、経営状況が厳しくなっている。種々の努力をして凌いでいるものの、将来に亘って経済基盤を安定させるには、賛助費の

増収が望まれる。

日本中国学会と斯文会との歴史的な関係に鑑み、当会の趣旨、活動に賛同してくださる学会員諸賢が賛助会員として当会の活動を盛り立ててくださるよう、お願い申し上げます。

賛助会員の制度等についてのお問い合わせは、下記の公益財団法人斯文会あてにくださるよう、お願い申し上げます。また、当会ホームページ <http://www.seido.or.jp> もご参照いただければ幸いです。

公益財団法人 斯文会

〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25

TEL 03-3251-4606 Fax 03-3251-4853

（田口 暢穂 記）

2021-22年度 各種委員会委員の構成

理事長：大木 康
 副理事長：浅見 洋二（担当：論文審査、出版、広報、会計）
 吾妻 重二（担当：大会、選挙管理、研究推進・国際交流、将来計画特別）

各種委員会委員（◎：委員長、○：副委員長、◆：幹事）

大会委員会

| | | |
|-------|--------|--------|
| ◎小島 毅 | ○野村 鮎子 | 垣内 景子 |
| 木島 史雄 | 坂井多穂子 | 辛 賢 |
| 谷口真由実 | 種村 和史 | ◆武田 祐樹 |

論文審査委員会

| | | |
|--------|-------|--------|
| ◎渡邊 義浩 | ○小松 謙 | ○中島 隆博 |
| 井川 義次 | 伊東 貴之 | 大西 克也 |
| 稀代麻也子 | 近藤 浩之 | 末永 高康 |
| 高山 大毅 | 竹越 孝 | 武田 雅哉 |
| 谷口 洋 | 中里見 敬 | 堀川 貴司 |
| 町 泉寿郎 | 松浦 恆雄 | 松江 崇 |
| 緑川 英樹 | 横手 裕 | ◆関 俊史 |

出版委員会

| | | |
|-------|--------|-------|
| ◎静永 健 | ○宇佐美文理 | 甲斐 雄一 |
| 渡邊 義浩 | 吾妻 重二 | 齋藤 希史 |
| 秋谷 裕幸 | ◆池田 恭哉 | |

選挙管理委員会

| | | |
|-------|--------|-------|
| ◎松原 朗 | ○有馬 卓也 | 恩田 裕正 |
| 河野貴美子 | 高橋 幸吉 | 陳 捷 |
| 松野 敏之 | 吉田 篤志 | ◆中嶋 諒 |

研究推進・国際交流委員会

| | | |
|--------|--------|--------|
| ◎三浦 秀一 | ○鈴木 将久 | 近藤 浩之 |
| 佐野 誠子 | 濱田 麻矢 | ◆齋藤 智寛 |

広報委員会

| | | |
|--------|-------|--------|
| ◎木津 祐子 | ○上田 望 | 閻 淑珍 |
| 錢 鷗 | 山下 一夫 | ◆笠見 弥生 |

将来計画特別委員会

| | | |
|-------|--------|-------|
| ◎柿 和順 | ○柳川 順子 | 長尾 直茂 |
| 萩原 正樹 | 早坂 俊廣 | 松尾 肇子 |
| ◆吉田 勉 | | |

各種委員会報告

【論文審査委員会】

委員長 渡邊 義浩

○学会報第73集応募論文の審査の経緯

2021年1月15日（消印有効）締め切りの応募論文は全21篇（哲学・思想部門6篇、文学・語学部門12篇、日本漢学部門3篇）であった。1月30日に論文審査委員会を開催し、論文1篇につき3名の査読委員（論文審査委員会委員1名を含む）を決めた。

3月20日開催の論文審査委員会で、査読委員3名の査読結果をもとに、哲学・思想部門4篇、文学・語学部門8篇、日本漢学部門1篇の計13篇の掲載を決めた。

今回、枚数超過や形式不備と認められた論文は皆無であった。来年以降も引き続き、「執筆要領」の遵守にご注意いただければ幸いである。

○その他、3月20日の論文審査委員会での審議決定事項

- ・学会報第74集依頼論文執筆候補者（評議員2名、一般会員2名）を決定し、理事会に推薦することとした。
- ・哲学・思想部門から1名、文学・語学部門から1名の学会賞候補者を決定し、理事会に推薦することとした。

【出版委員会】

委員長 静永 健

学会報第71集所収「学界展望」の中国語版が『古代文学前沿与評論』第5輯（中国社会科学院文学研究所古代文学学科編、2020年12月刊）に掲載されました。今回の翻訳作業より、中国社科院の翻訳スタッフと日本側原著者との連絡を仲介する方々を本学会会員より委嘱しました。以下の三氏です。ここに鳴謝いたします。

池田 恭哉 佐藤 浩一 秋谷 裕幸

なお次の翻訳版は2019年と2020年の2年分を併せて翻訳し、同誌続刊に掲載される予定です。

【選挙管理委員会】

委員長 松原 朗

来年度には評議員選挙と理事長選挙が予定されています。前回（昨年度）の選挙では、コロナ禍の中でスケジュールの変更を余儀なくされました。来年度についても、予断は許されません。この状況の中で、電子投票に移行すべく準備を始めております。手始めは、会員諸氏のメールアドレスを集めることです。よろしく協力いただけるよう、お願いいたします。

【将来計画特別委員会】

委員長 舩 和順

○2020年度大会アンケート結果報告

2020年10月10日・11日開催の大会に関して、同年11月半ばから翌年2月末日まで、本学会ホームページにて「2020年度大会アンケート」を行い、48名より貴重な回答を得た。

回答者のうち、大会参加者は42名、不参加者は6名。不参加の理由は、「当初から不参加の予定」が3名、「参加を試みたがアクセスできなかった」、「日程を間違えた」、「オンラインだと参加するのがおっくうになった」が、各1名であった。

詳細については、本学会ホームページにおいて掲載するので、是非、ご覧いただきたい。その上で、この場を借りて、概略を報告する。

■研究発表の実施方法（オンデマンド方式）について

「大変よかった」が15名（35.7%）、「よかった」が13名（31%）、「いずれともいえない」が10名（23.8%）と続いた。

自由記述では、「旅費や宿泊費が必要ない」「自分の好きな時間に視聴できた」「何度もじっくり聞くことができ

た」「興味あるものは一通り視聴できる」など、肯定的な回答があった一方で、「発表の醍醐味が薄らぐ」「会場の一体感がない」「発表者の顔が見えない」「発表者が一日中、張り付いていなければならない」など、問題点を指摘する回答もあった。その他、「実施方法としては適当とはいえない。あくまで緊急時の次善の策である」という回答もあった。

■研究発表の公開期間（当日9時～18時）について

「いずれともいえない」が16名（38.1%）、「よかった」が12名（28.6%）、「大変よかった」が7名（16.7%）、「あまりよくない」が6名（14.3%）と続いた。

自由記述では、「当日に限る必要はない」「夜間まで公開してほしい」「三日間くらいほしい」「一週間くらいほしい」など、時間の延長を要望する回答が多く寄せられたが、その一方で、司会者・発表者について、「一日中、待機しなければならない」「長時間の負担を強いる」など、時間の制限を求める回答も少なくなかった。

■研究発表の時間（20分間）について

妥当とする回答が37名（90.2%）と大半を占めたことから、研究発表の時間は適当であったといえる。

■司会のコメント方法について

「よかった」が17名（40.5%）と最も多く、次いで「大変よかった」が10名（23.8%）、「いずれともいえない」が9名（21.4%）、「あまりよくない」が6名（14.3%）と続いた。

司会者のコメントがあらかじめ文章化されたことについて、「じっくりと考えながら書ける」「不案内な領域については調べながらコメントできる」「すべて文字として残るので、発表者にも視聴者にとってもよい」など、肯定的な回答があった一方で、「司会者も映像で出た方がよ

い「司会がないも同然といった発表もあった」「発表者とのやりとりが進展しない例があった」など、問題点を指摘する回答もあった。

■質疑応答の方法について

「よかった」が16名(38.1%)と最も多く、次いで「いずれともいえない」「大変よかった」が同数で10名(23.8%)、「あまりよくなかった」が6名(14.3%)と続いた。

書き込み式の質疑応答について、「質問しやすい」「聞き逃すことがない」「文献を参照できる」「口頭より論点が明確になる」「質の高いやりとりが行われた」など、高く評価する回答が多く見られた。その一方で、「質疑の時間が短い」「議論の途中から、割り込むのは難しい」などの回答があった。さらに、質疑応答の時間制限が無かった点について、「発表者・司会者にとっての負担が大きい」といった回答もあった。

■今後の大会の方式について

今後オンライン方式による大会を開催する場合、「オンデマンド方式」希望が64.3%、Zoomなどを用いた「リアルタイム方式」希望が35.7%で、おおむね2対1の割合で、「オンデマンド方式」を希望する方が多かった。

「リアルタイム方式」を支持する意見としては、「緊張感は欠かせない」「達成感や充足感が大きい」「発表者の負担を軽減するため」「発表者を長時間拘束する必要がないため」などの回答があった。一方、「オンデマンド方式」を支持する意見としては、「自由な時間に視聴できる」「繰り返し見ることができる」「原典や参考資料を確認できる」「通信回線を気にしなくてもよい」「異なる部会の発表を視聴できる」などの回答があった。加えて、両方の方式を折衷する意見として「発表はオンデマンド、質疑はリアルタイム」あるいは「リアルタイムで発表と

質疑、それを録画してオンデマンドで公開」といった回答があった。

■総会について

「よかった」が9名(32.1%)と最も多く、次いで「いずれともいえない」「大変よかった」が同数で8名(28.6%)と続いた。

自由記述では、「授賞式が行われたのがよかった」「理事長の挨拶、自作の漢詩がすばらしかった」「学会賞受賞者の声が身近に感じられた」など、高い評価が得られ、中には「今後はこの形を積極的に活用すべきである」という提言もあった。その一方で「質疑応答の時間や方法がない」「総会だけはリアルタイム方式で行うべきであった」という回答があった。

■大会開催に関わる連絡のしかたについて

「よかった」が13名(31.7%)と最も多く、次いで「大変よかった」が12名(29.3%)、「いずれともいえない」が11名(26.8%)と続いた。一方、「よくなかった」が3名(7.3%)、「あまりよくなかった」が2名(4.9%)あったことは留意しなければならない。

自由記述では、電子メールでの連絡を希望する回答が少なくなかった。また、パスワード郵送の簡素化、パスワード紛失時の対策などに関する意見もあった。

■その他、第72回大会に関して

「大変な状況の中で開催が実現したのは素晴らしい」といった声に代表されるように、大会幹事校に対する謝辞が多数見られた。その中で、「具体案は思いつかないが、懇親会的な要素がほしかった」「今後の大会のあり方に、多くの可能性を示す良い機会になった」という回答も見られた。

事務局より

◎住所等の変更と会員名簿への掲載について

住所や所属機関の変更につきましては、速やかに事務局へお知らせください。特に学生会員の方が学生身分を喪失した場合には、必ずご連絡願います。電子メール、郵便、ファックス、あるいは会費納入時の振込用紙（ゆうちょ銀行払込取扱票）通信欄をご利用ください。

今年度10月発行の会員名簿には、8月末日までにお知らせいただいた会員情報を掲載いたします。それ以降の変更については次年度の掲載となりますので、ご了承ください。なお、以前は固定電話の番号（自宅または勤務先）のみを掲載しておりましたが、2013年度から携帯電話の番号も掲載できることといたしました。携帯番号を掲載することを希望される場合は、事務局までご一報願います（ご本人からのお申し出がない限り、既にご登録いただいている携帯番号を掲載することはありません）。

◎クレジットカードによる会費決済について

海外在住の会員を対象として、クレジットカードによる会費決済を行っております。ご希望の方は、事務局まで電子メールでご連絡ください。折り返し、決済用ページのURLをお送りいたします。なお、利用可能ブランドはVISA・MASTERのみです。ご了承ください。

メールアドレス登録のお願い

日本中国学会では、会員のみなさまのメールアドレス登録をお願いしています。

ホームページの「会員メールアドレス登録」

(URL: <http://nippon-chugoku-gakkai.org/?p=2274>)

よりご登録をお願いいたします。

パスワードは■■■■■■■■です。



日本中国学会事務局

電子メール：info@nippon-chugoku-gakkai.org

郵便：〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25

斯文会館内

ファックス：03-3251-4853

ゆうちょ銀行振替口座

口座番号：00160-9-89927

加入者名：日本中国学会

訃報

『学会便り』2020年第2号発行以降、次の方のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。
(敬称略)

杉田 泰史（東北地区）

逝去日不明

第73回大会開催のお知らせと研究発表の募集

会員各位：

陽春の候、会員各位におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、日本中国学会第73回大会は愛知大学が準備を担当し、本年10月9日（土）、10日（日）の両日、愛知大学名古屋校舎にて開催することとなりました。つきましては、下記の要領で研究発表を募集いたしますので、ふってご応募くださいますようお願い申し上げます。

2021年4月吉日

日本中国学会第73回大会準備会代表

白田 真佐子

記

1. 部 会 : 一、哲学・思想
二、文学・語学
三、日本漢文（日本漢学・日本漢詩文・漢文教育など）
四、パネルディスカッション（次世代シンポジウム）
2. 時 間 : 一～三は発表20分に質疑応答10分、四は報告、質疑応答含め全体で120分以内。
3. 締 切 : 2021年6月28日（月）（当日消印有効。簡易書留、レターパック、EMS 等追跡調査が可能な郵送手段でお願いします）
4. 応募方法 : 研究発表は、学術研究の最新の成果で、未発表かつ未公開のものに限ります。
一～三に応募される方は、氏名（フリガナ・所属研究機関および職位）・希望発表部会・連絡先メールアドレスを明記の上、発表題目および概要（800字以内、日本語による）を、大会準備会まで郵送すると同時に、それらの Word ファイル（.doc または .docx 形式）を E-mail（ファイル添付）により期日までに送付してください。E-mail 受信時には自動返信します。期日（日本時間）までに電子ファイルが届いていない場合、応募は受理できませんのでご注意ください。
四に応募される場合は、パネルの代表者がパネリスト全員の氏名（フリガナ、所属研究機関および職位、メールアドレスも明記のこと）、パネルの題目と概要（1,200字以内、日本語による）を、上記と同様の方法により、大会準備会宛て送付してください。なお、学会、研究会あるいは研究機関（研究室等）によって組織されたパネルも可とします。
※執筆者による校正はないため、完全原稿でお願いします。
5. 応募資格 : 研究発表の応募には、本学会会員資格が必要です。特に四については、パネリスト全員の本学会会員資格が必要となります。新入会員の方は、応募申し込み締切日までに会費の振り込みが必要となりますのでご注意ください。
6. 応募宛先・
問合わせ先 : 〒441-8522 愛知県豊橋市町畑町1-1
E-mail: japansinology73@email.plala.or.jp

◎本年は、一、哲学・思想 二、文学・語学 三、日本漢文、四、パネルディスカッションの四部会を予定しておりますが、応募状況により調整することも考えております。各部会の発表は、質疑応答も含めて日本語でお願いします。なお、バランスも勘案して審査を行ない、やむを得ずご発表をお断りすることもありますのでご了承ください。

◎パネルディスカッションに年齢制限はありませんが、次世代を担う若手研究者からの応募を歓迎します。またパネルの内容は、学会ホームページに「研究集録」として掲載される予定です。

◎学会ホームページを随時ご覧ください。